

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	昆虫と人生 : 論説
Author(s)	横山, 桐郎
Citation	龍南會雜誌, 155: 35-44
Issue date	1914-11-25
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/6373
Right	

天才の發揮は神の要求なり。宇宙の絶叫なり。是に據りて萬有進化し人類開明す。天才は當に修養鍊磨以て其大を致し、奮勵忍耐以て其功を收め節用休息以て亡滅を避け、由りて大に其才を發揮し、萬有の化に參し、大器晚成の理想郷に達するの素地を作すべし。

大天才既に活動の準備成るや確乎不動の大自覺に坐し自恃自信以て特立獨歩し眼中人なく腦裏敵なし。その天下を濶歩するや、億兆懾伏し、萬障影を遠ざく。かくて舊套なる束縛の國を去り、陳腐なる僞俗の界を捨て、鮮新なる自由の國に入り、高遠なる理想の郷に達す。其天才を發揮するや、劣惡泥の如き舊文明は破壊せられ、清明水の如き新文明は建設せらる。是乾坤の偉業樹つて、天才の使命終れるなり。噫壯なるかな、天才の業。それ幸なるかな、天才の士。

(大正三年五月六日稿)

昆虫と人生

横 山 桐 郎

碧落の秋は今や蒼梧の葉上に來つて風なきに婆娑と音して散る一葉は益々秋の深きを思はしめる、夏に榮ねた胡蝶も色さめて往日の勢なく、詩人の所謂秋の蝶の脆くも一吹く風に拂はれ様とする。

さは言へ一度晩涼を追うて郊外に出で見る時は秋虫の數々は或ひは微曲の音聲を弄し、或は霰の降るかの音して飛び亂れ吾人を迎へて呉れる。

昆虫と言へば諸君は直ぐ見悪い毛虫、芋虫を思ひ起し、又美しい胡蝶を聯想する事であらう、然し此美しい蝶こそ彼の見悪い毛虫、芋虫の後半世である、昆虫を捕へて一口に蟲けらと輕蔑して終へば其れ迄であ

るが、而も其蟲けら吾人との間には密接な關係が有るときいたら或は驚く諸君があるかも知れない、余は以下其らの關係に就て少しく述べて見たいと思ふ。

農業と昆虫抑も吾が國は農を以て主とする國である、即直接吾人が昆虫のために受ける利害は農業に於て最も甚だしいのである、従て吾々は先づ第一に此方面に就て注意する必要がある勿論農作物の害虫と言ても無數であつて、従つて吾々が受ける損害は仲々馬鹿に出来ない、一度害虫發生すれば、滿目青色を止めず万民飢に泣く事は昔から度々あることである。手近な例で言ふと、明治三十年に浮塵子と言ふ害虫が發生した時に受けた稻の損害は全國にわたつて被り金額にして、七千五百萬圓と言はれて居る、七千五百萬圓と言へば今では寧ろ少額であるが其當時に於ては容易ならぬ金額であつたらう、害虫の結果外國から輸入した米は約五千萬圓即ち當時折角日清戰役で支那から取つた償金の幾部分は一分にも足らぬ虫がつかつて終つた様なもので、日本も飛んだ居候を置いたものである。兎に角害虫が國家經濟を亂したと言ふべきである。

只に費用の上のみばかりでは無い當時の農民の慘狀は見聞するに忍びなかつたどの事である、實に薄利に安んじてゐる農民が専心一意頼んで以て口を糊する農産物が、一朝害虫の猖獗に遇つて田圃に狂奔し、周章狼狽するは誠に同情にたへない次第である、たゞに浮塵子ばかりではなく、螟虫などは年々四五千萬の損害を與へてゐる、如何に安く見積つても農産物の受ける害と云ふものは一年一億圓を下らぬどの事である。

米國などに於ては國が大きいだけ害虫の害も夥しく、米の Walsh と Riley の説による時は三億弗に達する由であるが本邦貨幣に換算すれば約六億千八百萬圓となるわけである、然るに Sanderson 氏の統計による時は北米合衆國に於ける虫害年額は十一億八千二百萬弗、即ち本邦の二拾三億六千四百萬圓余になる故大畧

知られた事であるが近頃に至つては虱も亦傳染病媒介者の一である事が報じられた。

即ち一般人間に寄生する「虱」は「メキシコチブス」菌を傳染するなかちをするし、よく小供の頭髮に寄生すアタマジラミも同様チブス菌を運搬し、其刺す事によつて菌を人体に移す事が確められた、今從來知られた傳染病の中昆虫によつて傳染するものを挙げれば

蚤の類 ペスト。

虱の類 チブス。

床虱(ナンキンムシ)熱帶黑熱病

蠅の類、チブス。コレラ。肺結核。ペスト。癩病。痘瘡。諸熱性病。諸種の腫物。トラホーム。睡眠病。

蚊の類、マラリヤ。黄熱病。ヒラリヤ病。

右によると蠅は最も恐る可き者である、彼の初夏から晩秋にかけてうるさい蠅の媒介による事を思へば、一匹の蠅とて仲々油斷のならない譯である。

五月蠅と書いて「うるさい」と讀む事は諸君の知つて居らるゝ事であらうが、實に彼らは手にたへぬ奴である。しかし英語の May fly は譯して、五月蠅ではないこれは蜉蝣「カゲロウ」の事である。蜉蝣、と言へば命の短かい事で、有名な虫で、昆虫學上の地位から云ふと蠅とはずつと異つたものである。

蚤がペストを傳へる事は以前からよく人々の熟知している事だが、日本に於ては、兵庫縣由良町にペストが流行した時に宮島、北里兩博士によつて確められたのである。

次に蚊がマラリヤの媒介者たる事も一般に知られて居る所で敢て目新しい事でもないが、之に就て自分

の知つてゐるだけを通じて見れば、抑もマラリヤの原虫は、千八百八十年に佛國の軍醫によつて、マラリヤに犯されて居た患者の赤血球内に發見されたので、蚊がマラリヤの傳播をつとめると云ふ事は *manson* と *Ross* によつて發見された。即蚊の中でも「*Anopheles*」と云ふ屬の者が患者の血液を吸ひ、それから又其蚊が健康人を刺す事に依つて病原は傳播されるのである。而して、蚊さへ居なければ、マラリヤは決して傳播しないと云ふ事實も証明されて居る。即實驗者は *Campagna* と稱へられて居る羅馬の周圍の最も荒れた且つ不健康地に於て、而もマラリヤ流行の季節中何か藥品等による防禦をせず只家屋を清潔に保ち夕方蚊の出現に先立つて、家に入つてひたすら蚊の刺す事をのみ避ける事によつて遂に該病にかゝる事を免れた。

勿論「*Anopheles*」なる蚊が刺したとて病菌さへ保つてゐなければ何の恐れる事もない現に、東京市中でも「*Anopheles*」はゐるし、熊本には特に多く、自分は此夏唐津にしばらく居たが出て來る蚊の三分の一はマラリヤ蚊だつた。マラリヤに關して面白い説がある、と云ふのは『昆虫學上より見たる羅馬の滅亡』とも云ふべきもので其説によると、羅馬及び光榮ありし希臘の滅亡は、蚊が其人民の血を吸ひマラリヤを蔓延したによると言ふので、之はハバート大學教授ホイラー氏が演説した所で長野菊次郎氏が其を譯して昆虫世界に掲載されたから左に其譯文を拜借して諸君に紹介しよう、尤も文体は譯文は文語体だが以前の關係上言文一致になほした。

氏（ハバート氏）の論旨によると無論、羅馬及び希臘がマラリヤを傳播する斑翅蚊（*mosquito*）のために一朝一夕に滅亡したとは言ふのではないが、永久に涉つて漸次に人民の勢力を滅殺した事は明らかである。古代に於ては羅馬は甚だ勇敢であり、愛國心に富み、健全な道德心を有した國民で其近隣を征服したが未だ敢て遠征を行

はなかつた。此状態にして持續したならば其勇氣を發現すべき事業は成さなかつたにしても、マラリヤの傳播は免れたであらう、元來羅馬の地は斑翅蚊の棲息に通じてゐる曠野に圍繞されて、マラリヤの播布には恰好な媒介者を有してゐる。然し乍らマラリヤの病原さへ存在しない限りは之を蔓延せしめるものではない、然るに之が病原を輸入したのは實に羅馬人の遠征に基因してゐる、羅馬人が初めて熱帶地方に接したのはカルテージ征服の際で、多分マラリヤ病原はカルテージ人から傳播したものであらう。然し當時に於ける傳染は余り猛烈ではなかつた。羅馬人の滅亡に傾いた階段は明かにマセドニアのフィリップとの戰に在る。フィリップは希臘及び東部地方を征服した人である。希臘はすでに東方のマラリヤ感染人種と久しく交通して其幾百萬は小亞細亞ペルシヤ及び其他東部地方に移殖し最早衰頹の途に上りつゝあつた。蓋し上古の東部地方即ちエシプトからバビロニアに至るまでは全くマラリヤに浸潤して居た。マセドニアのフィリップ及其子の亞歷山大王は東部地方の大部を征服したが、羅馬は漸次に大王の領土を蠶食して紀元前廿七年アウグスタス、シーザーの時に及んでは、遂に希臘及び埃及を征服して、東部の全体を併呑した、斯くて羅馬帝國は全盛の極に達したが又衰退の種を蒔いたのも此時であつた。即ち戰勝を誇つて伊太利に凱旋した數萬の羅馬兵の血液中にはマラリヤの病原をもたらしした、伊太利の沼澤に無數に産する斑翅蚊は、彼らから其病原を吸ひ取つて他の人民に傳播させ、漸次に害毒を全人民に普及して遂に羅馬人の古來の勇氣を沮喪せしむるに至つたのである。是に於て寒地に住んで居てマラリヤに感染せぬゴッス、バンデルス、ハンス等の慄悍な人民の浸入するや、マラリヤのために身体衰弱してゐる羅馬人は、是に抵抗すべき勇氣も消失してしまひ、加之伊太利に於ける農業の頹廢も亦斑翅蚊の繁殖に適した、羅馬は戰捷の余澤として巨萬の富を輸入した結果、人民は

贅澤を極め奢侈を盡して、田圃の耕作整理は之がため廢頽に歸し、以前は禾穀蔬菜を饒産した沃野膏土も、今や蚊と云ふ厄介者の發生地と化し、排水されぬ土地は人民の住居に適せぬ故荒蕪は次第に其度を加へ、終に羅馬の繁盛時代に於て、羅馬のカムパニヤは全く排水拋棄の状態となり、其他は伊太利でマラリヤ發生の最惡地となり、最後に至る迄羅馬の市民は是に苦しむてゐたのである』と勿論羅馬滅亡が獨りマラリヤのみによるものではないが又面白いではないか。

昆虫と文學。マラリヤで以外に長くなつて終つたが次に昆虫と文學に就て、少々のべて見たい。もつとも自分は文學には至つて知識の乏しい者故深く兩者の間に立ち入つて論ずる様な事は出来ないがたゞ俳句、和歌等に現はれて來るものに就て少し御話するのみでやめてたく。

由來昆虫は可憐なものであるだけに昔から俳句や、和歌等に甚だ多くうたはれてゐる。就中蟬、螢其他秋の虫の類は一般の人々に愛されるものである、よく世間に言はれてゐる蚯蚓鳴きと云ふのがあるが、一体誰が蚯蚓にして終つたかは知らないが、あれは決して蚯蚓が鳴くのではなくつて、昆虫の一種のケラのなき聲である、盲目で且つ啞の蚯蚓こそ果報者であるが、折角咽喉を絞つて賞められたいとつとめたケラこそいゝ面の皮である。秋の夜なご椽に座つて折柄の月を眺めて居る時などに何處からともなくかすかに耳朶をかすめて來る低い音律こそケラの雄が思ひに堪へかねて雌をよぶ戀の歌である

古犬や蚯蚓の唄に感じ貌。

(一茶)

夜機織る小窓の下や蚯蚓なく

(甲山)

据風呂の流れ溜りや蚯蚓なく

(瀨南)

元來が鳴き聲に悲哀を帶びたもの故余り男性的な句はない様に思ふ。

夏から秋へかけて青空を疾驅する蜻蛉は又龍蠅とも書く即英語の Dragon fly であるが其名の示すが如くに、天空を疾風の如くに驅る様は勇壯なものである、尤も蜻蛉と言つても色々種類があつて蜻蛉の様な悍猛な者、テフトンボの様に夏日天空を翩々さまるで浮ぶが如くに舞つてゐるもの、又はクロトンボ、かはとんぼの類に至ると川邊の草間をよな〜と彷徨つてゐるものもある

炎天を黒装束のとんぼかな

之はてふとんぼを讀んだ句らしい

かんざしの後をよなよなかはとんぼ

又蜻蛉の産卵は其尾端を水中に浸して行ふのであるが小供らはよく蜻蛉が行水を使つてゐるとか尻で水を飲むとか言つてゐる。

蜻蛉が尻で弄ぶるよ大井川

(一茶)

此句は一茶が産卵の狀を見て讀んだものであらう尤も彼が産卵である事を知つてゐたか否かは余の關しないところだ。

蜻蛉やとりつきかねし草の上

(桃青)

静かな小川の邊に蟪か、かはとんぼが風にゆられる草の葉に、手をかけ熄つて居る狀である

蜻蛉のツツとぬけたる廊下哉

(斜目)

これは蜻蛉の句と思はれる、

蝶も亦よくうたはれる虫で

釣鐘にとまりて眠る胡蝶かな

(嵐雪)

枕する腕に蝶々のねむりけり

(一茶)

蝶々をそつとたさへぬ舞扇

(鬼史)

いくらもあるが余り長くなるからこれ位にして俳句はやめて和歌を見ると

きりきりす鳴や霜夜のさむしろに

衣かたしきひとりかもねん

は誰でも知つてゐる有名なもの。

實に一葉秋を報じて新涼の氣天地にみち天空拭ふが如く星光、鮮かにかぐやく一夜郊外に金琵琶の佳調を
さく時正に之一、雨晴を送る初秋の色、百虫夜を専らにす胡秋の感がある、吟聲忽ち足下に起るかと思れば忽
ちやむで又聲起り、斷絶し／＼してなく音の麗はしさは又何物に比する事が出来よう

夕ぐれの風にきはへる松虫は

たが妻琴の音に通ふらん

(千陰)

たき添はる霜の夜床になく聲も

結はれ行くきりぎりすかな

(春海)

鳴く虫の露の宿は變らじと

あすの假寢や何處なるらん

(依平)

之らは皆秋の虫を歌うたものである又夕ぐれなど淋しくひびいて来る蛸を讀むたのに

ひぐらしの聲ぞかすかに聲ゆなる

一葉色づく秋の梢に

(契沖)

最後に螢を讀むものに

音もせで操にもゆる螢こそ

鳴く虫よりも哀れなりけれ

以外に長くなつて終つた、昆虫と人世に就てはまだ／＼記すべき事はあるが今度はこれ位にして置く。

ただ生のみ

一、三、甲、松延彌三郎

歐洲の一角に起つた一つの葛藤は導火線となつて既に世界的な一大騷亂を誘出した幾萬の兵は斃れ幾十萬の士は傷き掠奪虐殺は至る所に行はれて予は父を呼び婦は夫をたづね悲鳴泣聲は大修羅場に満ちて居る之れ果して何等の現象ぞ吾人は何を以て是を説明せんとするか、事に果あれば必ず因がある今や此の如き事態を現出した以上決してその因なきを得ぬ政治家は是を國際關係の爆發と云ひ歴史家は民族の衝突となし經濟學者は人口増加の結果なりと解釋するのであらうその他觀察方面の異なるに従つて夫々の説明を下すことが出來よう勿論これ等もこの大動亂の重なる原因なるに相違ない然し私は更に一步を進めて國際關係の爆發民族の衝突等は何に起因するかと云ふことを知りたいこれは成程大問題たるに違ない吾々の如き幼稚な頭腦では到底